

R7 年度 修論・卒論の書き方の手引き

1. 論文の体裁

(1) 論文は、ワープロまたはタイプで清書した形で提出する。手書きは認めない。
* 使用するワープロに制限はないが、テキスト形式に変換不可能なワープロの使用は避ける。

(2) 論文は A4 サイズの用紙を用いる。
* 特別な用紙は支給しないが、普通のコピー用紙を利用するのを原則とする。極端に薄い紙や厚い紙は使用しない。和文原稿は 10~11 pt 程度の文字の大きさで 45 文字×42 行に打つ。なお、2000 字の±10% の範囲内であれば、多少の変更はよい。 図表などは、ファイル上で挿入し、切り張りは極力さける。切り張りをする場合は、複写する際に「影」が出ないように気をつける。
* A4 の用紙の内、上 20 mm、下 25 mm(この中にページ番号)、左 25 mm、右 25 mm は空白として空ける。
* 英文の場合は、12 pt 程度の文字の大きさで、ハーフ・スペースの 12 ピッチ (相当するプロポーションナルピッチ、ワープロの半角ピッチ) で打ち 1 ページ 32 行とする。ただし、行数は±10% の範囲内で変動してもよい。
* 図表は、できるだけ大きくする。特に図表中の文字の大きさに注意すること。

(3) 卒論は、原則として、和文の場合、本文 20 ページ以内、付録も含めて 35 ページ以内、英文の場合、本文 30 ページ以内、付録も含めて 50 ページ以内とする。

(4) 修論は、原則として、和文の場合、本文 35 ページ以内、付録も含めて 65 ページ以内、英文の場合、本文 50 ページ以内、付録も含めて 90 ページ以内とする。

(5) 令和 7 年度の提出の際は、以下の要領に従う。
* 最初の締切期限、および最終判定のための修正原稿は、どちらも PDF ファイルとする。提出方法は、提出締め切りの 2 週間前までに連絡があるので注意すること。
* 判定会議の後 (提出期限は別途指示)、研究室を通じて最終原稿の PDF ファイルを提出する。PDF ファイルには使用した全てのフォントを埋め込むこと。

2. 第 1 ページの書き方 (和文)

(1) 卒業論文・修士論文を年度とともに明記。第 1 行目左寄せ、本文と同程度の大きさの文字。

(2) 和文題目・英文題目をセンタリングして書く。文字は 14~18 pt 程度で太字(Bf)にする。

(3) 提出年月日 (最終提出日ではなく、初回提出日とする) (日本語・英語) をセンタリングして記入。文字は 12 pt 程度の大きさ。

(4) 所属 (和文・英文) をセンタリングして 14 pt 程度の文字の大きさで書く。

(5) 氏名 (和文、英文) をセンタリングして 14 pt 程度の文字の大きさで書く。英文名は、名 (頭文字のみ大文字)、姓 (全て大文字) の順とする。

(6) 和文要旨 300~350 字程度で論文の要旨を記述する。文字は 10 pt 程度の大きさ。両端を 20 mm 程度あける。

(7) 英文要旨 和文要旨の下に 100~150 語程度の英文要旨を記入する。書式は和文要旨に準ずる。

(8) 以上の項目を表紙にバランスよく配置する。

3. 2 ページ目

2 ページ目は目次を書く。目次に含まれる標題は節までとする。

4. 本文は 3 ページ目から以下にしたがって書く（和文）。

- (1) 書式：図、表を含め、全ての記述は A4 用紙の所定の範囲内に収める。
- (2) ページ：用紙の下部の中央にページ番号を記入する（表紙と目次にはページをつけて、本文の最初のページを 1 ページ目とする）。
- (3) 構成：序論（あるいは、はじめに、緒言など）、本文、結論（あるいは、おわりに、結言など）、謝辞およびあとがき、参考文献、付録の順とする。
- (4) 章：第 1 章を序論に、最終章を結論に当てる。各章には標題を付ける。
 - * 標題の前に 2 行の空白行、後に 1 行の空白行を設ける。
 - * 標題は章番号、1 文字分の空白に続いて書く。
- (5) 節：各章は必要に応じて節に分けることが望ましい。各節には標題を付ける。
 - * 標題の前に 1 行の空白行を設ける。
 - * 標題は章番号、ピリオド、節番号、1 文字分の空白に続いて書き、下線は引かない。
- (6) 節の分割：各節は必要に応じてさらに細かく分けてもよい。その場合の書き方は (5)に準ずる。
 - * 標題は例えば、「2.1.2」、「2.1.2.2」のように書く。
- (7) 箇条書き：内容をわかり易くするため、箇条書きスタイルを取り入れることが望ましい。
 - * 番号は片括弧「」で表記し、1 文字分の空白に続いて書く。例えば、1), 2) のように書く。
2 行以上にわたる場合、2 行目は 1 行目最初の文字の下から始めると見やすい。
- (8) 文章：コンパクトにまとめ、長い文章は避ける。文章の内容が変わる場合は改行する。
 - * 文頭および改行した場合の最初には、1 文字分の空白を入れる。
 - * 数字もしくは英字（ギリシャ文字含む）は半角とする。
- (9) 数式：重要な式および本文中に引用されている式には、式番号を付ける。
 - * 1 行の式は 2 行を用いて書く。すなわち、式の上下に半行程の空白行を設ける。これは式が 2 行以上にわたる場合も同様である。
 - * 式は行の左端から書かずに、2 文字分の空白に続いて書く。
 - * 式番号は式の最終行の右端に「()」を付けて示す。
 - * 式番号は章ごとの一連番号で、例えば、「(2.1)」のように示す。
 - * 複数個の式を 1 つの式番号で表示したいときは、式番号の直後に小文字のアルファベットをつけて、例えば、「(2.1a)」のように示す。
 - * 本文中で引用する場合には、例えば、「式(2.1), Eq. (2.1)」のように示す。
- (10) 図：原則として電子データとして本文中に貼り込む。標準的な大きさは図の説明を含めて 1 ページの 1/6 とする。審査用論文は切り貼りでも構わないが、最終原稿は、PDF ファイルによる提出であるため、すべて電子データとして本文中に貼り込むこととする。
 - * 図表の横に文章を入れる場合は、図表は A4 用紙の原稿範囲内の右端に寄せて貼る。
 - * 図と本文との間には、上下、左右とも最低 8 mm 以上の空白を設ける。
 - * 図の数はなるべく減らし（まとめて 1 枚の図に書く）、かつ、書き方を工夫して簡潔にまとめる。
 - * 図の番号と標題は図の下に書き、番号と標題の間に 1 文字分の空白を入れる。
 - * 図の番号は、式番号に準じて付ける（例：図-2.1, 図-2.2(b), Fig. 2.1）。

* 本文中での引用も同じ記号を用いる。

(11) 表：図に準ずる（例：表-2.1, Table 2.2）。

* 表の番号と標題は表の上に書く。

(12) 写真：図に準ずる（例：写真-3.1, Photo 3.2）。

(13) 参考文献：本文中で引用する参考文献は、本文中に著者名と発行年を、例えば、「…松岡・八幡（1983）によると…」「…となることが示されている（高谷ら, 1985；松岡・八幡, 1983）」のように、本文中に著者名まで引用する場合は続けてカッコ内に発行年を記し、著者名を引用しない場合はカッコ内に著者名と発行年を記す（複数の場合はセミコロンで区切る）。なお、3名以上の著者の場合、第2著者以下は「○○ら」のように省略しても良い。引用した文献は、最後にまとめて記す。この際、

* 「参考文献」という標題を書く前に2行の空白行、後に1行の空白行を設ける。

* 英文は12ピッチもしくは相当する各種ピッチでタイプし、シングルルースペースとする。

* 文献が論文の場合には、開始ページと終了ページを書くこと。

* 文献は行の最初から記入し、2行以上にわたるとき、2行目以降は2文字分のインデントを設ける。

* 順序は最初に日本語論文を著者の五十音順に書き、ついで英文論文を著者のアルファベット順に書く。ただし、同一著者の複数の論文は新しいものから書くこととし、英文著者名は、すべてラストネーム、ファースト、ミドルネームのイニシャルとする。

<論文の場合>

高谷富谷・北村泰寿・桜井春輔(1985)：半無限多層弾性体の内部加振問題への伝達マトリックス法の応用、土木学会論文集、No. 362/I-4, pp. 363-369.

松岡 理・八幡夏恵子(1983)：三次元均質等方弾性体の基本解とその応用、日本建築学会論文報告集、No. 330, pp. 17-43.

Miles, J.W. (1957) : On the Generation of Surface Waves by Shear Flows, J. Fluid Mech., Vol. 3, pp. 185-204.

Wiegel, R.L. and Miche, M. (1966) : Generation of Wind Waves, Proc. of ASCE, Vol. 92, No. WW2, pp. 1-26.

<単行本の場合>

C.R.ワイリー(富久泰明訳)(1973)：工業数学、ブレイン図書、350 p.

中井 博(1983)：土木構造物の振動解析、森北出版、400 p.

Lamb, H. (1964) : Hydrodynamics, Cambridge Univ. Press, 256 p.

<会議講演集の場合>

高谷富谷・北村泰寿・桜井春輔(1982)：半無限弾性体内部における加振問題の解析、第6回日本地震工学シンポジウム、pp. 1609-1616.

Takatani, T., Kitamura, Y. and Sakurai, S. (1884): Vibrations of a Semi-Infinite Elastic Medium due to Buried Sources, Proc. of 8th World Conf. Earthq. Engrg., San Francisco, pp. 56-70.

<研究報告、示方書の場合>

北村泰寿・桜井春輔・陳徳生(1980)：二層弾性体表面の点加振による表面変位の数値解析、建設工学研究所報告、No. 22, pp. 145-166.

日本道路協会(1980)：道路橋示方書・同解説、丸善、650 p.

(14) 付録：付録は複数あっても構わない。各付録の書き方は章の書き方に準ずる。

* 式、図、表、写真的番号には、先頭に大文字の「A」を付ける（例；A1.5）。

5. 英文の場合の注意（和文との相違点のみ）

- (1) 第1ページは日本語の表紙に準ずるが、すべて日本語と英語を入れ替える。
- (2) 段落の開始行では12.7 mm (0.5 in.) あける。
- (3) 式は行の左端から書かずに、12.7 mm (0.5 in.) の空白に続いて書く。
- (4) 箇条書きの場合は、各項目の最後にピリオドではなくセミコロンを使用する。ただし、最後の項目だけはピリオドとする。
- (5) 参考文献はシングルスペースで打つ。

* 日本語の論文は英訳の上、最後に「(in Japanese)」と明記する。

6. 修論・卒論作成時の注意事項

修論・卒論作成時に以下のことに注意すること。

- (1) 修士及び学部の学生は、論文作成時に高いモラルが要求される。修論・卒論も学術論文の一つとして書き下す必要があり、原則としてオリジナリティー（独創性）とプライオリティー（先取権）を備えたものが要求される。先輩の修論・卒論を含む他研究者の論文を盗用すること及び研究成果やデータのねつ造などは厳に慎むべきものである。研究過程の記録をとり、要求されたときにオリジナリティーとプライオリティーを実証できるようにしておく必要がある。また、先輩の修論・卒論からのコピー・アンド・ペーストは厳に慎むと同時に、他論文や新聞の引用などは、厳しい制約とルールがあるので、指導教員とよく相談すること。
- (2) 学術雑誌や国際会議に学術論文を投稿するときには、必ず指導教員と事前に相談して許可を得ること。無断での投稿は一切認めない。

(注意)

- ・この手引で不明な点があれば、令和7年度土木工学専攻図書担当（判治剛 hanji@civil.nagoya-u.ac.jp）に相談ください。